

採録「総合開館 20 周年記念事業 国際シンポジウム『写真美術館はなぜ、必要か?』」

写真美術館はなぜ必要か——中国の場合

顧錚

中国、写真家／復旦大学教授

写真美術館はなぜ必要か ——中国の場合

顧錚

他の登壇者の方々と同様に、私にも「写真美術館はなぜ必要か？」というテーマ与えられています。ただ、他の4名に比べて私が一番写真美術館の必要性について説得力を持たなくていけないと思います。なぜなら、厳密に言うと私の出身国中国には、写真美術館が一つもないからです。

中国は芸術品の収集において長い歴史を持っていますが、近代美術館、もしくは近代美術館という概念がこの国にもたらされたのは清王朝（1644～1911年）の終わりになってからでした。1905年、実業家の張謇が帝室に帝国博物館の建設を請願し、同年に南通博物苑を建設しました。1912年に中華民国が成立すると、新政府は国立歴史博物館建設のための部局を設置し、清王朝時代の帝国博物館は1925年に故宮博物館と改められました。1936年には南京に国立美術館（南京人民大会堂）がつくられ、1949年に中華人民共和国が成立した後、1962年には北京に中国美術館がつくられました。そして毛沢東が1976年に亡くなってからの40年は、美術館がますます増えていっています。

南通博物苑から考えると、近代美術館の発展の歴史は100年以上経過していることとなります。にもかかわらず現在においても、写真のコレクション、調査、展示を目的とした美術館は一つもありません。もちろん、中国に美術品がありすぎるからという言い訳は通用しません。

中国に写真美術館がない理由はいくつかあります。まず中国では長らく、写真は単なる記録の手段としてしか捉えられていませんでした。芸術形式の一つとしての創造的価値は見過ごされていました。そして戦争、革命、社会の混乱の中で、古い時代の写真が大量に損なわれ、写真美術館設立の足がかりとなるような資料が失われてしまいました。写真をきちんと理解し、写真美術館の運営を行えるような専門家がないことも深刻な問題です。さらに、現存する中国の美術館には写真部門を備えているところがないので、写真作品の収集は通常行われていません。熱心な取り組みが生まれても、担当者が変わるとすぐに途絶えてしまいます。例えば、広東美術館は



中国の美術館で初めて写真をビジュアル・アートの一形式として真面目に扱った美術館で、中国の現代写真作品を体系的に所蔵コレクションに加えようとなりました。2005年からは広州国際写真ビエンナーレを三回にわたり開催しています。この画期的な活動は、美術館館長がその役職から降ろされると同時に終わってしまいました。

とは言え、近年インターネットによる写真の普及や中国現代写真の発展のおかげで、正式な写真美術館の設立につながる素晴らしい動きも出て来ています。二つ例を挙げてみたいと思います。

中国における写真美術館の原型を一番先に示したのは浙江省麗水市にある麗水写真美術館です。2007年に3,000平方メートルの敷地にオープンしたこの施設は、611枚の写真作品、617枚のヴィンテージ写真、写真集や雑誌などを含む5,444点を所蔵しています。しかし今のところは、専門性の高い写真美術館というよりはアンティークカメラの博物館といった様子です。

最新情報は、11月に広東省連州市から届いたばかりです。連州国際写真フェスティバルで、連州国際写真美術館の建設が竣工し、今年と同フェスティバルから正式にオープンすると発表されたのです。フランス人キュレーターと中国人キュレーターが共同ディレクションするこの美術館は、フランスの写真専門美術館であるニセフォル・ニエプス美術館と提携しています。連州国際写真美術館が中国現代写真の作品収集に特化するのに対し、ニエプス美術館はグローバルな市場から様々な国の作品を収集します。最終目標は、世界の写真史を網羅する常設展を作り上げることです。この美術館の出資元は地元の自治体ですが、正確にどれくらい出資したのかは明らかになっていません。とにかく、中国がやっと写真美術館の重要性に気づいたということでしょう。遅れても無いよりはましです。

日本語では「Photography」は「写真」と訳され、「真実または事実を写す」という意味を持ちます。中国語では「撮影」と訳され、「事実または現実の影を捉える」という意味になります。これを見ると同じ東アジアの国でも写真の性質についての理解が少し異なることが分かります。中国人のほうが、この表現媒体をあまり信用していないようです。写真は事実そのものを捉えるのではなく、その影しか捉えられないと思っているのです。中国人のほうが、日本人よりも写真に対して悲観的な見方を持っているのかもしれない。

しかし悲観的な見方を持つことは、中国に写真美術館がない説明にはなりません。何を隠そう、写真は中国の現代史の忠実な目撃者であり続けています。写真は、それ特有の方法で私たちが経験する社会的変化を捉え、提示してきましたし、中国人は独特の撮影技術を持っています。たくさんの写真が戦争や、革命や、社会の混乱を生き延び、事実の証としての価値はもちろん、精神的、感情的、概念的、芸術的な価値を持つ物的証拠および文化遺産としての地位を

確立しました。それが歴史の忠実な記録であろうとクリエイティブな表現であろうと、写真には中国人写真家およびアーティストの歴史、文化、そして人類の運命に対する解釈が写し出されています。このような写真を収集し、保存し、研究する写真美術館の不在は、自分たちの歴史に対する恐怖と無関心をさらけ出しているということです。写真に写る視覚的証拠と歴史に向き合うことを拒むのなら、どうやって未来に誠実に向き合えば良いのでしょうか。

そして、写真美術館が写真の保護と共有以上にすべきこと——写真美術館にとって一番重要な役割と責任は、歴史の物語を再構築し、文化を再定義することです。

私たちは今、インターネット上にイメージが氾濫する時代に生きています。おそらく個人個人が、自分の経験や教育をもとに受容するイメージを処理して整理する術を身につけているでしょう。しかし写真美術館の行うイメージの整理は、もっと重要な使命を抱えています。写真史を語り直し、写真の実践を再解釈し、一つの組織として自身を再定義すること。歴史を読み直そうとする行為は、私たちにより良い未来や新しい活動の可能性に向けた希望や期待をもたらしてくれるでしょう。

結論として、写真美術館は私たちが現在の中国にとりわけ必要としているものです。これで、「写真美術館がなぜ必要か」という問いに中国の観点からお答えできたと思います。

(和訳：田村かのこ [Art Translators Collective])